児童にいじめ行為

業で「無視しよう」

滋賀・野洲

「今回の」など
の一部

50代教諭謝罪

滋賀県野洲市の市立小学校で、学級担任が発達障害を疑った男子児童に対して不適切な言動を繰り返し、学校が「担任によるいじめ」と認めて交代させていたことが関係者への取材で判明した。この学校では前年度にも違う学年で児童へのいじめ行為により担任が交代しており、保護者からは市教委や学校の姿勢を問う声が上がっている。【村瀬優子】

関係者によると、2年生の学級を担任する50代の男性教諭が5月以降、この児童が授業で質問した際に「本当に言葉を知らんな」と繰り返し発言していた。担任は数回にわたって「うるさいなあ」「スルー（無視）しよう」などとも口にしたほか、1学期の終わりには「言葉クイズをします。みんなのためでなく言葉を知らない○○さんのためにします」と発言。周りの児童らも「スルーしよう」「言葉を知らないくせに」などと同調するようになったという。

7月の保護者面談で男子児童の母親が担任から「お子さんは注意欠陥多動性障害（ADHD）なので、早急に発達検査を受けるべきだ。そういう子に効く薬がある」などと言われ、その後、男子児童から授業の内容を聞いて発覚した。

保護者からの指摘で事実を把握した学校は「再三にわたり特定児童へのいじめ発言があった」として、8月に学級の保護者説明会を開いて陳謝。新学期から担任を交代すると伝えた。男性教諭は体調不良を訴え、2学期から休職。自身の言動を振り返り「先生のように人を傷つける言葉は絶対に言わないでほしい」などと謝罪する手紙を書き、新担任が代読して学級の児童に伝えたという。

男性教諭は男子児童の保護者に宛てた書面で「一連の発言は、明らかに私によるいじめです」と認め、「発達障害の専門家でもないのに、これまでの経験のみで判断し、安易に受診を勧めてしまった」などと謝罪した。

この学校では今年2月にも、4年生の担任だった30代の男性臨時講師が、特定の児童をアニメのキャラクターに例えたことで、同級生が児童をからかういじめ行為につながったなどとして、担任を交代させていた。

市教委は毎日新聞の取材に対し、「教員によるいじめ事案が繰り返されたことは重く受け止めている。男子児童の言動に問題はなく、教員が力量のなさを棚に上げて児童を発達障害と決めつけたことも大きな問題。再発防止に努めたい」と話した。

発達障害決めつけ 母憤り

「先生が子どもをいじめるなんて思いもしなかった」。授業中の質問などを巡って担任教諭から「いじめ発言」を受けていた男子児童の母親は取材に対し、「息子に授業の妨げになる言動があったのなら、『質問は先生の話が終わった後にしてね』と伝えるなど、適切に指導してもらいたかった」と心情を語った。

「お子さんは発達障害だ」と唐突に受診を勧められた7月の保護者面談。長男が授業をさえぎって発言をしたり、よく質問をしたりすると聞かされたが、そうしたことを学校側から伝えられたのも初めてだった。当時は衝撃を受けながら「検査を受ける方向で考えます」と答えたが、思い返すと「担任が独断で発達障害と決めつけて検査を勧めるのはおかしい」と憤る。

また、長男は担任の発言について「言葉を知らない僕が悪い」と口にしているが、他の子から同様の言葉を言われたのは嫌だったと話しているという。母親は「小学校低学年の子どもは大人の言うことを素直に聞いてしまう。先生たちは子どもへの影響力をもっと自覚して行動すべきだ。市教委や学校は適切な指導をしてほしい」と訴えた。

文部科学省によると、小中学校の通常学級には6・5%の割合で学習面や行動面に課題のある児童・生徒がおり、すべての教員に特別支援教育に関する一定の知識や技能を持つことが求められている。同省特別支援教育課の担当者は、教員が児童の発達障害を疑った場合の対応として「すぐに障害と決めつけるのではなく、子どもの状況を踏まえ、どういう支援をすべきか、学校全体で考えることが重要。いきなり検査を勧めるのではなく、特別支援教育コーディネーターなどを交えて相談し、適切な支援をしてほしい」と話す。

この学校の場合、「管理職を含む校内委員会で対応を検討し、保護者へ丁寧に説明する」という基本方針を定めていたが、今回のケースでは担任が独断で受診を勧めていた。

発達障害に関わる指導法に詳しい新潟大教職大学院の長澤正樹教授（特別支援教育）は「発達障害の診断は医師でも非常に難しく、教員の経験や勘で判断できるものではない。指導がしにくいという教師側の事情で安易に受診を勧めたのであれば問題だ」と指摘。「校長は特別支援教育を重視する姿勢を示し、教員の取るべき手順を明確にして、相談しやすい風土を作ることが重要だ」と話している。